

ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成¹⁾

佐々木 掌子

慶應義塾大学・日本学術振興会

尾崎 幸謙

独立行政法人科学技術振興機構

本研究は、新たなジェンダー・アイデンティティ尺度を作成し、その信頼性・妥当性を検討することを目的とした。これまでの尺度ではジェンダー・アイデンティティを具体的な性別役割や性指向などで測定してきたが、本尺度は Erikson のアイデンティティ理論に則り、ある性別へのアイデンティティ感覚を構成概念とした。対象は大学生である（女性 205 名、男性 207 名）。4 因子を想定して尺度作成をし、2 因子モデル、4 因子モデル、高次因子モデルの適合度指標を比較したところ、高次因子モデルがもっとも適合度がよかった。採択されたのは、高次の 2 因子の下位に各々 2 つの因子が配されるモデルであった。また、妥当性の検討のために、性別役割、性別受容、自尊心といった尺度との相関や、性同一性障害をもつ者（男性から女性への移行者 male to female “MTF” 120 名、女性から男性への移行者 female to male “FTM” 155 名）との比較が行われ、妥当性が確認された。

キーワード：ジェンダー・アイデンティティ、トランスジェンダー、性同一性障害、尺度

問 題

“ジェンダー・アイデンティティ”には、2つの代表的な定義が挙げられる。1つが“自分が所属している性別について知っているという感覚のこと。すなわち‘私は男性である’もしくは‘私は女性である’”という認識のこと (Stoller, 1964)”

という定義であり、もう1つが“男性あるいは女性、あるいはそのどちらとも規定されないものとしての個性の統一性、一貫性、持続性 (Money, 1965 東 優子訳 2000)”という定義である。いずれも身体的な性別が曖昧なインターセックスや身体的な性別を越境するトランスジェンダーなどの臨床研究から生みだされた。その後この用語は広がりを見せ、フェミニズムの流れを汲んだ女性学やジェンダー研究においても、いまや主要な概念となっている。しかし非典型的な性心理発達をする人々を対象に、どの性別で生きていくのかを扱ってきた臨床研究とは違い、ジェンダー研究では文化社会的に抑圧されてきた女性を解放するという動きから、主に対象を女性一般としてきたためジェンダー・アイデンティティを“社会的性別役割に対する志向性”として捉えてきたといえる。このように臨床研究とジェンダー研究では、この概念の出発点及び対象が異なるため議論が噛み合

1) 本論文は、平成 15 年度青山学院大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部を加筆訂正したものです。御指導いただきました青山学院大学丸山千秋先生に御礼申し上げます。また、本論文をまとめるにあたっては慶應義塾大学安藤寿康先生、伊藤美奈子先生、大阪府立大学東優子先生、早稲田大学現代日本研究所兵藤智佳先生、そして審査員の先生方にご助言を賜りました。心より感謝申し上げます。最後に、調査に快く協力して下さった上に有益なコメントをくださいました阿部輝夫先生、塚田攻先生、都築忠義先生、針間克己先生、そして性同一性障害当事者の皆様方に厚く御礼申し上げます。

わないことがしばしばある。

そこで本研究では、臨床研究での“ある性別に対するアイデンティティ”をジェンダー・アイデンティティとして捉える立場で、新たなジェンダー・アイデンティティ尺度を作成することを目的とした。

ジェンダー・アイデンティティと性役割

これまでのジェンダー・アイデンティティに関する研究では、社会的性役割を構成概念としてジェンダー・アイデンティティを測定してきたため、ステレオタイプな社会的性役割を志向しているならばジェンダー・アイデンティティが高いとみなしてきた。たとえばBSRI (Bem, 1974) やPAQ (Spence, Helmreich, & Stapp, 1975) に代表されるような形容(動)詞による性役割尺度で女性性得点が高ければ、女性アイデンティティが高いとみなしたり(東, 2002; Burke, Stets & Piroggood 1988; Drass, 1986; O'Heron & Orlofsky, 1990), MMPIの下位尺度(mf尺度)のように、具体的な性役割でジェンダー・アイデンティティを測定したりしてきた(秋山・板井, 1986; Althof, Lothstein, Jones, & Shen, 1983; Blanchard & Freund, 1983; 土肥, 1996; Drass, 1986; Freund, Langevin, Staterberg, & Steiner, 1977; 石田, 1994; 伊藤, 2001; Kurian & Kukreja, 1995; O'Heron & Orlofsky, 1990; 下條, 1997)。

こうした測定法は、ステレオタイプな“性役割”への“志向性”を示すものであり、“ある性別”に対する“アイデンティティ”を測定しているわけではない。“だいたいの出産プランがある(土肥, 1996), 洋服や髪型に気を配る(石田, 1994), 女性にとって幸福な結婚は何事にもかえられない(伊藤, 2001)”といった項目に“はい”と回答した人は、女性という性別へのアイデンティティが強いのではなく、女性役割志向性が強いということを示していると言える。これだとたとえば、だいたいの出産プランがあったとしても、別の要因で女性という性別にアイデンティティをもちにく

い女性を、ジェンダー・アイデンティティが強いとみなすことになる。そこで本尺度では、具体的な性役割を設定せずに自己の性別のありようについて抽象的に問うことで、従来の問題点をクリアしようとした。

ジェンダー・アイデンティティと性指向

性指向とは“性的魅力を感じる対象の性別が何かである(針間, 2000)”。Erikson (1959 小此木 訳 1973; 1968 岩瀬 訳 1973) は、性的同一性対両性的拡散について記述を残し、これを異性との性的親密さによってつくられるものだと述べている。

土肥(1996)のジェンダー・アイデンティティ尺度でも“異性との親密性”が構成概念に含まれている。異性選択の心理的準備の際、ジェンダー・アイデンティティによってジェンダー・スキーマの見直しがされるので、これがジェンダー・アイデンティティ確立の指標になると選んだのだという。また小此木・及川(1981)も、ジェンダー・アイデンティティの構成要素に性指向を含めていた。鑪(2002)も“男が真に男であることは、異性としての女に出会った時であり、女が真に女となるということは、異性としての男に出会った時である”と述べており、異性愛が前提となってジェンダー・アイデンティティが作られていくとしている。

しかし女性に性指向をもつ女性(女性同性愛者)では、女性に性的な魅力を感じながらも女性という性別へのアイデンティティを持っているのであり、ジェンダー・アイデンティティが確立していないとはいえない。男性同性愛者に関しても同様である。“かつては性指向と性同一性が混同して論じられたこともあったが、現在ではそれぞれ別個の概念と理解されている(針間, 1999)”と言われているように、ジェンダー・アイデンティティと性指向は異なる概念である。性指向は、ジェンダー・アイデンティティに寄与する一つの要因にはなりうるであろうが、尺度の構成概念の

中に含めるのは不適切だと思われる。したがって、本研究ではジェンダー・アイデンティティの構成概念に性指向を含めない。

ジェンダー・アイデンティティとアイデンティティ

また、これまでのジェンダー・アイデンティティ尺度には、精神分析的見地から Erikson が提起した“アイデンティティ”という概念が反映されていないという問題点もある。

社会心理学的なアイデンティティ概念使用について Erikson (1968 岩瀬訳 1973) は、社会心理学においてもアイデンティティ概念が有用であることが証明されたという喜びと同時に、本質が捉えられていないという苦言も呈している。アイデンティティを社会的役割、人格特性、意識的自画像などという用語と同じに取り扱うことは、“その概念のもつ、より扱い難く、またより悪魔的な——つまり活力に満ちた——言外の意味を取り去ろうとする”ことだというのである。

これはジェンダー・アイデンティティという概念にも当てはまる。ジェンダー・アイデンティティをある性別に対する社会的役割や人格特性、意識的自己像という側面からのみ捉えるのではなく、ある性別に対するアイデンティティとして、すなわちある性別に対する統一性、一貫性、持続性という側面から捉える必要があると思われる。

そこで、Erikson のアイデンティティ概念を反映させるために谷 (2001) の多次元自我同一性尺度 (Multidimensional Ego Identity Scale: MEIS) を援用することにした。谷 (2004) は、Erikson の理論から自我同一性の感覚を“斉一性・連続性をもった主観的な自分自身が、まわりからみられている社会的な自分と一致するという感覚”と捉えて尺度作成をしているのである。

本研究ではジェンダー・アイデンティティを“斉一性・連続性をもった主観的な自分の性別が、まわりからみられている社会的な自分の性別と一致するという感覚”として捉え、谷の多次元自我同一性尺度 (MEIS) を援用して尺度を作成するこ

とにした。

本研究におけるジェンダー・アイデンティティ

一般的には“今日、フェミニズムの中では‘セックス’は‘生物学的性別’、‘ジェンダー’は‘社会的文化的性別’を指す用語として定着している (上野, 2002)”と言われている。先行研究の尺度でも、この観点から社会的文化的性別への志向性を測定してきたのだと思われる。しかし性別は生物学的かつ社会的なものであり、どちらかだけの要因で成り立つものではない (Diamond, 2002; Hines, 2004; Money, 1994; 佐々木, 2006; Zucker & Bradley, 1995)。ここからセックス、ここからジェンダーと区別することは困難である。これはインターセックスではないトランスジェンダー当事者を考えると分かりやすい。たとえば女性から男性へ移行する場合、身体的な性別は XX 型の性染色体と乳房やヴァギナをもつ女性型を示しているが、その他の生物学的性別の指標を考えると行動遺伝学モデル (Bailey, Dunne, & Martin, 2000; Buhrich, Bailey, & Martin, 1991; Coolidge, Thede, & Young, 2002; Knafo, Lervolino, & Plomin, 2005) や神経細胞レベル (Kruiver, Zhou, Pool, Hofman, Gooren, & Swaab, 2000; Zhou, Hofman, Gooren, & Swaab, 1995) から、何らかの男性型への偏りが示唆されている。生物学的性別をどのレベルで考えるかで何をセックスとして捉えるのかは異なってくるのである。そこで本尺度では、社会的文化的でありながらも生物学的な側面も排除しない“性別”を“ジェンダー”として捉え、以下の定義に基づいた尺度作成を行うことにした。“斉一性・連続性をもった主観的な自分の性別が、まわりからみられている社会的な自分の性別と一致するという感覚”。

したがって、本尺度が従来のジェンダー・アイデンティティ尺度と異なる点は以下3点である。①具体的な性役割で測定せず自己の性別のありようを抽象的に問う、②身体的性別と性自認が同じでなくとも同性愛指向をもっていても測定ができ

る、③ Erikson のアイデンティティ感覚という概念を取り入れる。

方 法

項目の収集（下位概念の設定）

谷 (2001) は、自我同一性の感覚を測定するため Erikson (1950 仁科訳 1977・1980; 1959 小此木訳 1973; 1968 岩瀬訳 1973) の記述を抽出し、多次元自我同一性尺度 (MEIS) を開発している。この尺度は自我全体に関する尺度でありジェンダーに特化しているものではないが、エゴ・アイデンティティの感覚を捉えることに成功しているため本尺度にも採用できると考えられる。そこで本尺度は MEIS の下位概念に基づいた。

1つ目が“自己斉一性・連続性”である。これは Erikson の自我同一性に関する以下の記述から設定された。“自我同一性は、その主観的側面からみると、自我のさまざまな統合方法に対して、自我斉一性と連続性が存在するという事実と、これらの統合方法が、他者に対して自分が持つ意味の斉一性と連続性を保証する働きをしているという事実の自覚である (1959 小此木訳 1973, p. 22)”, “自我同一性の感覚とは、内的な斉一性と連続性を維持する個人の能力 (心理学的意味での個人の自我) が、他者に対して自分が持つ意味の斉一性と連続性とに調和することから生じる自信である (1959 小此木訳 1973, p. 94)”。そこで、自己の性別が一貫しているという感覚について“自己一貫的性同一性”として設定した。

2つ目が“対他的同一性”である。“自己斉一性・連続性”のためには“重要な他者から認められるだろうという内的確信 (1959 小此木訳 1973, p. 127; 1968 岩瀬訳 1973, p. 165)”が必要だという。そこで、自己の性別が他者の思う性別と一致しているという感覚について“他者一致的性同一性”と設定した。

3つ目が“対自的同一性”である。Erikson は、同一性の明瞭な感覚について“自分がどこに向

かっていこうとしているのかよく分かっている感覚 (1959 小此木訳 1973, p. 127; 1968 岩瀬訳 1973, p. 165)”と著している。そこで、自己の性別での展望性が認識できているという感覚について“展望的性同一性”と設定した。

4つ目が“心理社会的同一性”である。Erikson は文化社会的な中での自分の位置感覚について記述しており、“自我が特定の社会的現実の枠組みの中で定義されている自我へと発達しつつあるという確信 (1959 小此木訳 1973, p. 22; 1968 岩瀬訳 1973, p. 49)”と述べている。そこで、自己の性別が社会とつながりを持っているという感覚のことを“社会現実的性同一性”として設定した。

以上のように本尺度では“自己一貫的性同一性”, “他者一致的性同一性”, “展望的性同一性”, “社会現実的性同一性”の4下位概念を設定した。

項目については、たとえば“過去において自分をなくしてしまったように感じる”は、“過去において自分の性別に自信がもてなくなったことがある”に、“自分がどうなりたいのかはっきりしている”は“自分が女性 (男性, 両性あるいはどちらでもない性) としてどうなりたいのかはっきりしている”に変更された。そしてこの下位概念と項目の内容的妥当性が性同一性障害の臨床に関わる精神科医1名と臨床心理士1名, 指導教授, 心理学系の大学院生らによって検討された。

予備調査（項目の選定）——手続きと対象

2003年7月, 都内の大学の講義時間中に、設定した下位概念で作られた20項目からなる質問紙を配布し集団式で実施しその場で回収した。質問紙には性自認を女性, 男性, 両性・どちらでもないから選択する欄と共に, 身体的性別を女性, 男性, 間性から選ぶ欄が設けられていた。回答者は性自認を女性と選択すれば女性の項目を回答した (たとえば“自分が女性としてどうなりたいのかはっきりしている”という項目など)。

分析対象者数は, 性自認と身体的性別を女性と選択した者 (以下“女性”と表記する) 153名,

性自認と身体的性別を男性と選択した者 153 名（以下“男性”と表記する）であり、平均年齢は女性 20.3 歳（18～23 歳）、男性 21.7 歳（19～30 歳）であった。なお“男性”と“女性”以外のデータは統計的に十分な数を回収できなかったため分析には含まなかったため、合計 306 名分のデータを分析対象とした。

男女別で探索的因子分析（重み付けのない最小二乗法）をしたところ、男性の固有値は第 1 因子が 7.597、第 2 因子が 2.468、第 3 因子が 1.265、第 4 因子が 1.117、第 5 因子が .981、第 6 因子が .842、女性の固有値は、第 1 因子が 6.887、第 2 因子が 2.824、第 3 因子が 1.283、第 4 因子が 1.128、第 5 因子が 1.014、第 6 因子が .839 であった。スクリープロットをみると固有値は第 2 因子までが高く、そこから急に減少していた。固有値の減衰率と解釈可能性から判断して、2 因子を指定しプロマックス回転による因子分析を行った。その後、因子負荷量が .40 以下となる項目と男女で異なる因子に入った項目があったので、それら 5 項目を除いた。そして再度、男女別に因子分析をしたところ、男女で同様の因子構造が抽出された。また男女込みでも同様であった（固有値は第 1 因子が 5.668、第 2 因子が 2.596、第 3 因子が 1.016、第 4 因子が .765）。

4 因子モデルを仮定していたにもかかわらず 2 因子が抽出されたのは、仮定していた下位概念同士が 1 つの因子としてまとまった可能性があるとして“自己一貫的性同一性”と“他者一致的性同一性”の相関係数、“展望的性同一性”と“社会現実的性同一性”の相関係数をそれぞれ求めたところ、前者が $r=.635$ 、後者が $r=.698$ であった。この相関の高さから、前者をまとめるひとつの因子、後者をまとめる 1 つの因子といった上位に相当する高次因子の存在が想定された。そこで、得られた 2 因子モデルと仮定していた 4 因子モデル、そして高次因子モデルのどれがもっとも適合度が高いのかを比較するため確認的因子分析を行った。

なお高次因子モデルについては“社会現実的性同一性”因子と“他者一致的性同一性”因子の誤差分散が負の値をとったため、0 に固定して推定をおこなった。

その結果、2 因子モデルが $\chi^2=309.7$ ($df=89$, $p<.0001$), $AIC=13893.4$, $BIC=14008.8$, $RMSEA=0.09$, 4 因子モデルが $\chi^2=251.5$ ($df=84$, $p<.0001$), $AIC=13845.1$, $BIC=13979.2$, $RMSEA=0.081$, 高次因子モデルが $\chi^2=258.5$ ($df=87$, $p<.0001$), $AIC=13846.1$, $BIC=13969.0$, $RMSEA=0.080$ であることが示された。2 因子モデルよりも 4 因子モデルと高次因子モデルのほうが適合度がいいが、4 因子モデルと高次因子モデルでは競合していた（AIC では 4 因子モデルのほうが適合度がよく、BIC と RMSEA では高次因子モデルのほうが適合度が高い）。そこで予備調査では、結論を保留することにした。本調査で人数を増やし、再度、適合度指標を検討する。

本調査（信頼性および妥当性の検討）——手続きと対象

2003 年 10 月、都内の大学の講義時間中に集団式で質問紙を配布しその場で回収した。

対象者数は、女性 205 名、男性 207 名であり、その他は十分な数を回収することができなかったため 412 名分のデータを分析することにした。平均年齢は、女性 22.03 歳（18～44 歳、無回答 48 名）、男性 22.18 歳（18～53 歳、無回答 39 名）であった。

また、妥当性を検証するためにジェンダー・アイデンティティがもっとも不全状態にあると考えられる性同一性障害²⁾をもつ人々からの協力を得た。性同一性障害とは、身体的な性別（出生時に割り当てられた性別）に対する違和感を持ち、そ

2) 本研究では、トランスジェンダー当事者を性同一性障害当事者と表記することにした。これは、精神神経科のクリニックを通じて回答協力者を募ったためである。

れとは異なる性別への帰属を持つ状態をさす。したがって、本尺度の“自己一貫的性同一性”や“他者一致的性同一性”は性同一性障害を持つ者のほうが有意に得点が低いことが予想されるため、彼らの協力は構成概念妥当性の検討に適っている。

対象者は、性別違和を主訴に精神神経科クリニックを訪れ性同一性障害と診断された人々である。彼らは精神科医から直接質問紙を手渡された。回収についてはクリニック内で回答しその場で提出するか、もしくは後ほど郵送するかを選択してもらった。配布期間は2003年10~11月である。協力者数は、身体的性別（出生時に割り当てられた性別）を男性、性自認を女性と選択した者（以下 male to female “MTF”と表記する）120名、身体的性別（出生時に割り当てられた性別）を女性、性自認を男性と選択した者（以下 female to male “FTM”と表記する）155名であり、その他は十分な数を回収することができなかつたため、275名分のデータを分析対象とすることにした。平均年齢は、MTF34.4歳（15~53歳、無回答29名）、FTM26.7歳（13~46歳、無回答42名）であった。なお回答者は自分の思う性別の欄を回答するため、MTFは女性の質問項目欄（“自分が女性としてどうなりたいのかははっきりしている”など）を、FTMは男性の質問項目欄（“自分が男性としてどうなりたいのかははっきりしている”など）をそれぞれ回答している。

本調査——測定尺度

①ジェンダー・アイデンティティ尺度 (Gender Identity Scale: GIS)

予備調査で選定された項目である。15項目から成る。評定は“全くあてはまらない”・“ほとんどあてはまらない”・“どちらかというにあてはまらない”・“どちらともいえない”・“どちらかというにあてはまる”・“かなりあてはまる”・“非常にあてはまる”の7段階である。

②自尊心尺度（構成概念妥当性）

ジェンダー・アイデンティティと自尊心につい

ては、圧倒的に女性に多い摂食障害との絡みでしばしば女性のみを対象に取り上げられてきた（齊藤, 2004）。伊藤 (2001) も女子のみを対象にして、性の非受容や性的成熟の戸惑いが自尊心と関連があることを見出している。一方男性においては摂食障害は少ないものの、松木 (1997) が摂食障害をもつ男性事例についてジェンダー・アイデンティティの問題を論じている。したがって、ジェンダー・アイデンティティは女性全般と男性の中でも不適応が想定される人々に関連があることが予想される。そこで性同一性障害当事者にも自尊心尺度の回答を求めた。使用尺度は Rosenberg (1965) の邦訳版（山本・松井・山成, 1982）の10項目で、評定は5段階である。

③性別受容に関する項目（併存的妥当性）

先行研究ではジェンダー・アイデンティティを測定するとき、しばしば性別受容でそれを捉えることが行われてきた（青木, 1991；秋山・板井, 1986；土肥, 1996；伊藤, 2001；松本・村上, 1985）。そこで小出 (2000) の“性別受容性尺度”を使用した。しかし、この尺度を因子分析したところ因子負荷量が.40以上の項目が8項目中3項目しかなく、しかもその項目は性役割ステレオタイプ志向を問うものであって（項目例：“男言葉には男が、女言葉には女が、それぞれふさわしいと思う”）、性別受容を問うには不適切であると思われた。

そこで、青木 (1991) と伊藤 (2001) が女性性受容を問う項目として使用した“女に生まれてよかったと思う”、“生まれ変わるとしたら男女どちらがいいか”という2項目に相当する項目を小出 (2000) の尺度から抜いてそれを採用することにした。以下がその2項目である。“自分の今の性別に生まれてよかったと思う”、“今度生まれ変わるとしたら、今とは反対の性別に生まれてほしい”。評定は4段階である。

④ステレオタイプな性役割への同調尺度（併存的妥当性）

ジェンダー・アイデンティティを構成する領域として伊藤(2001)によって挙げられた因子に“ステレオタイプな性役割への同調”がある。性役割志向的なものを見方をしていることは、女性(男性)としてどうなりたいたのかということの明確性(展望的性同一性)や、社会と自分の性別が適応的に結びついているという感覚(社会現実的性同一性)と関連があると考え採用した。評定は5段階であり、6項目である。

⑤性役割パーソナリティ尺度(併存的妥当性)

ジェンダー・アイデンティティを捉える際、しばしば用いられてきたのは性役割パーソナリティ尺度である。これはステレオタイプな性役割への同調と同様に“展望的性同一性”や“社会現実的性同一性”との関連が予想できるとされるため採用した。今回は協力者の負担を考え、もっとも項目数の少ない伊藤(1978)の性役割パーソナリティ尺度を使用することにした。評定は7段階であり、男性性10項目、女性性10項目である。

妥当性の検討内容

“自己一貫的性同一性”と“他者一致的性同一性”については、性別受容2項目との相関で併存的妥当性を検討し、性同一性障害当事者との得点差および当事者と非当事者の自尊心尺度の相関で構成概念妥当性を検討する。“展望的性同一性”と“社会現実的性同一性”については、性別受容2項目、ステレオタイプな性役割への同調、性役割パーソナリティ尺度の相関で併存的妥当性を検討し、男女の得点差で構成概念妥当性を検討する。

結 果

因子分析結果(因子モデルの確定)

2因子モデル、仮定していた4因子モデル、そして高次因子モデルの中でどれがもっとも適合度がよいのかを比較するため確認的因子分析を行った。なお、高次因子モデルについては“社会現実的性同一性”因子の誤差分散が負の値をとったた

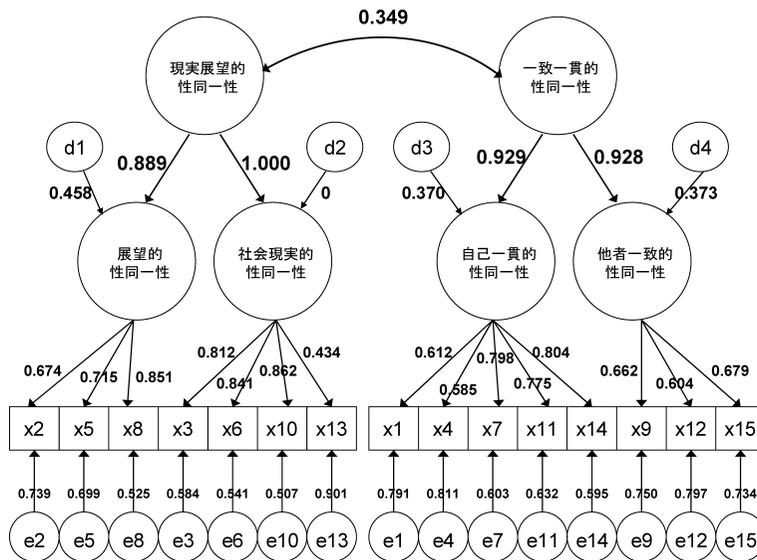
め、0に固定して推定を行った³⁾。

その結果、2因子モデルが $\chi^2=289.5$ ($df=89$, $p<.0001$), AIC=17588.9, BIC=17713.5, RMSEA=0.074, 4因子モデルが $\chi^2=228.5$ ($df=84$, $p<.0001$), AIC=17537.9, BIC=17682.7, RMSEA=0.065, 高次因子モデルが $\chi^2=229.6$ ($df=86$, $p<.0001$), AIC=17534.9, BIC=17671.7, RMSEA=0.064であることが示されたため、本調査では高次因子モデルが採択された(Figure 1)。“自己一貫的性同一性”と“他者一致的性同一性”の高次因子は“一致一貫的性同一性”と名づけ、“展望的性同一性”と“社会現実的性同一性”の高次因子は“現実展望的性同一性”と名づけることにした。

また、男女込み($N=412$)で因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った結果、固有値1以上の2因子が抽出され、予備調査とはほぼ同じ因子構造が得られた(固有値は第1因子が5.511, 第2因子が2.799, 第3因子が0.941)。男女別の因子構造もほぼ同様であった。

探索的因子分析を4因子解で行った場合、1因子目と2因子目は因子負荷量から“現実展望的性同一性”と“一致一貫的性同一性”と命名することができた。しかし3因子目と4因子目は解釈不可能であった。これは探索的因子分析の結果得ら

3) 誤差分散が負に推定されるという不適解(ヘイウッド・ケース)は、狩野(1998)によれば良性の不適解と悪性の不適解に区別される。良性の不適解とは、標本変動の影響で誤差分散が負になってしまったことを指し、良性と判断されるためには①反復が収束、②推定値が安定、③標準誤差が同程度、④信頼区間に0を含む、⑤基準化残差が同程度、が全て達成されることが条件として挙げられている。本分析では、①から⑤まで全てが達成されたので、良性の不適解と判断した。また、誤差分散を0としたために“現実展望的性同一性”から“社会現実的性同一性”への因子負荷量が1となっているが、だからといって、2つの因子の名前を同一とは考えなかった。それは、この不適解は標本変動の影響によるものであり、母集団においても因子負荷量が1では必ずしもないからである。



注. 双方向矢印は相関係数, 上から下への片方向矢印は因子負荷量, d と e は誤差項, x は質問項目番号

Figure 1 ジェンダー・アイデンティティ尺度 (GIS) の高次因子モデル

れた3因子目と4因子目は、1因子目と2因子目で説明された後の残差を説明していたからである。したがって、探索的因子分析によって求められた4因子と高次因子モデルの1次因子にあたる4因子は異なる。

以下、信頼性・妥当性の検討は、高次の2因子と低次の4因子それぞれについて行うことにした。

GISの信頼性検討結果

各下位尺度の内的整合性は、項目と共に Table 1 に示す。“他者一致的性同一性”は若干低かったが、それ以外は十分に高い値が得られた。

妥当性の検討①：各尺度相関

妥当性検討尺度（項目）の基礎統計量については、Table 2 に示す。

併存的妥当性の検討のため、性別受容項目、ステレオタイプな性役割への同調、性役割パーソナリティとの相関を出した。結果を Table 3 に示す。性別受容項目は、全因子で男女ともに有意な相関がみられた。ステレオタイプな性役割への同調は、高次の“現実展望的性同一性”とその低次因子で低い相関が男女ともに確認された。また性役割

パーソナリティは、男性では男性性にと、女性では女性性にとそれぞれ低い相関がみられた。

構成概念妥当性については、自尊心との相関を出した。その結果、女性とFTMでは全因子に、MTFでは2因子に有意な相関がみられ、男性は無相関であった (Table 4)。

妥当性の検討②：“現実展望的性同一性”の男女差

女性のほうが性役割に葛藤を感じやすいという先行研究 (柏木, 1972 ; 伊藤, 1978 ; 伊藤・秋津, 1983 ; 馬場, 1997 ; 遠藤・橋本, 1998) から、高次の“現実展望的性同一性”と低次の“展望的性同一性”, “社会現実的性同一性”の得点は、男性よりも女性のほうが低いことが予想される。

t検定の結果、高次の“一致一貫的性同一性”と低次の2因子には有意差がなかったが、高次の“現実展望的性同一性”, 低次の“社会現実的性同一性”には有意な差が認められ、女性のほうが有意に低かった。しかし、低次の“展望的性同一性”には有意差はなかった (高次/一致一貫的:

Table 1 ジェンダー・アイデンティティ尺度 (GIS) 質問項目

現実展望的性同一性 (女性: $\alpha=.86$ / 男性: $\alpha=.88$)	
展望的性同一性 (女性: $\alpha=.83$ / 男性: $\alpha=.76$)	
2.	自分が女性 (男性) として望んでいることがはっきりしている。
5.	自分が女性 (男性) としてどうなりたいのかはっきりしている。
8.	自分が女性 (男性) としてすべきことが、はっきりしている。
社会現実的性同一性 (女性: $\alpha=.80$ / 男性: $\alpha=.83$)	
3.	現実の社会の中で、女性 (男性) として自分らしい生き方ができると思う。
6.	現実の社会の中で、女性 (男性) として自分らしい生活が送れる自信がある。
10.	現実の社会の中で、女性 (男性) として自分の可能性を充分に実現できると思う。
#13.	女性 (男性) として自分らしく生きてゆくことは、現実の社会の中では難しいだろうと思う。
一致一貫的性同一性 (女性: $\alpha=.87$ / 男性: $\alpha=.82$)	
自己一貫的性同一性 (女性: $\alpha=.81$ / 男性: $\alpha=.82$)	
#1.	過去において、自分の性別に自信がもてなくなったことがある。
#4.	過去において、自分の性別をなくしてしまったような気がする。
#7.	いつからか自分の性別がわからなくなってしまったような気がする。
#11.	今のままでは次第に自分の性別がわからなくなっていくような気がする。
#14.	自分の性別に迷いを感じることもある。
他者一致的性同一性 (女性: $\alpha=.71$ / 男性: $\alpha=.66$)	
#9.	人に見られている自分の性別と本当の自分の性別は一致していないと感じる。
#12.	女性 (男性) としての自分は、人には理解されないだろう。
#15.	人前での自分の性別は、本当の自分の性別ではないような気がする。

は反転項目

Table 2 妥当性検討尺度 (項目) の基礎統計量

	女性 (N=205)		男性 (N=207)	
	平均値 (SD)	α 係数	平均値 (SD)	α 係数
性別受容	6.01 (1.67)	.659	6.62 (1.47)	.554
ステレオ	18.31 (4.57)	.735	18.04 (5.15)	.780
男性性	39.98 (8.10)	.764	39.51 (7.82)	.682
女性性	44.11 (9.78)	.870	43.87 (10.61)	.873
自尊心	32.92 (7.75)	.880	33.29 (7.78)	.837

注. 性別受容 = 性別受容 2 項目, ステレオ = 性役割ステレオタイプへの同調, 男性性 = 男性役割パーソナリティ, 女性性 = 女性役割パーソナリティ

$t=0.31, ns$, 現実展望的: $t=-3.29, p<.001$, 低次/自己一貫的: $t=0.39, ns$, 他者一致的: $t=-1.35, ns$, 展望的: $t=1.82, ns$, 社会現実的: $t=4.05, p<.001$, いずれも $df=410$ 。

妥当性の検討③: “一致一貫的性同一性”の性同一性障害当事者との比較

性同一性障害当事者は非当事者よりも“一致一貫的性同一性”とその低次因子の得点が低くなるであろうことが予想される。そこで、女性、男性、MTF、FTMの群の違いを水準とした一元配置の分散分析を行った。

その結果、“一致一貫的性同一性”とその低次因子は、性同一性障害当事者のほうが有意に低かった (一致一貫的: $F(3, 683)=284.01, p<.001$, 自己一貫的: $F(3, 683)=217.88, p<.001$, 他者一致的: $F(3, 683)=196.90, p<.001$)。

しかし、“展望的性同一性”については、当事者のほうが高く ($F(3, 683)=24.64, p<.001$)、“社会現実的性同一性”は、男性がその他3群よりも有意に高かった ($F(3, 683)=5.90, p<.001$)。結果は Table 5 に示す。

Table 3 GIS と妥当性検討尺度（項目）の相関（併存的妥当性）

高次 2 因子（女性 N=205, 男性 N=207）

	一致一貫的性同一性		現実展望的性同一性	
	女性	男性	女性	男性
性別受容	.294***	.328***	.421***	.330***
ステレオ	-.019	.078	.252***	.201**
男性性	.013	.131	.102	.326***
女性性	.081	-.037	.163*	-.071

低次 4 因子（女性 N=205, 男性 N=207）

	自己一貫的性同一性		他者一致的性同一性		展望的性同一性		社会現実的性同一性	
	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
性別受容	.249***	.322***	.328***	.240***	.344***	.306***	.408***	.317***
ステレオ	-.028	.090	-.001	.020	.283***	.195**	.181***	.186**
男性性	.009	.109	.018	.127	.115	.264***	.074	.342***
女性性	.048	-.065	.125	.014	.182*	-.030	.163*	.118

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

注. 性別受容=性別受容 2 項目, ステレオ=性別役割ステレオタイプへの同調, 男性性=男性役割パーソナリティ, 女性性=女性役割パーソナリティ

Table 4 GIS と自尊心尺度の相関（構成概念妥当性）

高次 2 因子

	一致一貫的性同一性	現実展望的性同一性
女性 (N=205)	.325***	.333***
男性 (N=207)	-.080	-.086
MTF (N=120)	.280***	.242***
FTM (N=155)	.350***	.427***

低次 4 因子

	自己一貫的性同一性	他者一致的性同一性	展望的性同一性	社会現実的性同一性
女性 (N=205)	.295***	.330***	.295***	.304***
男性 (N=207)	-.077	-.061	-.060	-.100
MTF (N=120)	.169	.348***	.060	.336***
FTM (N=155)	.259***	.450***	.244***	.429***

*** $p < .001$

なお，“一致一貫的性同一性”とその低次因子は等分散性が棄却されたため Games-Howell 法で，“現実展望的性同一性”とその低次因子は Tukey 法で多重比較された。

考 察

妥当性の検討について

“一致一貫的性同一性”とその低次因子については、性別受容 2 項目との相関で併存的妥当性が確認された。また、性同一性障害当事者との比較と

Table 5 因子別平均値と標準偏差（構成概念妥当性）

高次 2 因子				
	一致一貫的性同一性	現実展望的性同一性		
女性 (N=205)	52.16 (6.62)	35.16 (7.64)		
男性 (N=207)	51.97 (6.06)	37.71 (8.06)		
MTF (N=120)	33.55 (10.13)	37.36 (7.04)		
FTM (N=155)	33.41 (10.95)	39.14 (6.98)		
分散分析	284.01***	8.79***		
	MTF・FTM<女性・男性	女性<男性・MTF・FTM		
低次 4 因子				
	自己一貫的性同一性	他者一致的性同一性	展望的性同一性	社会現実的性同一性
女性 (N=205)	32.58 (3.99)	25.00 (3.32)	15.04 (3.81)	20.12 (4.69)
男性 (N=207)	32.73 (4.10)	25.39 (3.42)	15.75 (3.96)	21.97 (4.59)
MTF (N=120)	21.66 (6.89)	16.30 (6.48)	17.00 (3.60)	20.37 (4.45)
FTM (N=155)	21.89 (7.19)	15.96 (6.30)	18.18 (3.06)	20.97 (5.19)
分散分析	217.88***	196.90***	24.64***	5.90***
	MTF・FTM<女性・男性	MTF・FTM<女性・男性	女性・男性<MTF<FTM	女性・MTF・FTM<男性

() 内は SD *** $p<.001$

注. 多重比較により有意な差が見られた箇所については不等号で示した。

自尊心との相関によって、構成概念妥当性を確認した。“現実展望的性同一性”とその低次因子については、性別受容項目、ステレオタイプな性役割への同調および性役割パーソナリティとの相関から併存的妥当性を確認した。また構成概念妥当性については、男女の得点差と自尊心との相関から確認した。ただし自尊心については、群ごとで相関の有無があったため後述する。

なお、いずれの因子も相関係数は低く、強く妥当性が支持されたとは言いがたいように思われる。しかし本尺度のメリットは、性別受容や性役割など、今までジェンダー・アイデンティティと混在して捉えられていた類似概念を各々弁別できるところにある。したがって、得られた相関係数値で妥当であると判断した。

ジェンダー・アイデンティティと自尊心について

ジェンダー・アイデンティティと自尊心については、非当事者男性では関連がないことを予想し

た。このことは Wade & Gelso (1998) の研究でも言われており、尺度のうちの 2 因子 (“Reference Group Nondependent Diversity : さまざまな男性がいることへの好意的評価” と “Reference Group Nondependent Similarity : 男性全般とつながっているという感情”) が自尊心 (SEI: Coopersmith, 1967) と無相関だったという。男性役割パーソナリティと自尊心に関連はあっても (東 清和, 2000 ; 石田, 1994), 男性という性別へのアイデンティティと自尊心には関連がないということが本研究でも示されたといえる。

また予測と反せず、不適応状態にある場合は男性でも自尊心との相関がみられたが、FTM では全因子で相関があったのに対し、MTF では低次の“他者一致的性同一性”と“社会現実的性同一性”のみに関連があった。このことについては、女性が男性として生きるよりも男性が女性として生きる際の社会的スティグマのほうが大きい (Heyes

& Leonald, 1983 ; 東, 2005) ことが関連しているのではないかと考えられる。つまり、女性としての自己に一貫性があり女性としてどうありたいのかが明確であるとしても、スティグマがゆえに自尊心にはつながらず、他者や社会にどう見られるか、どう受け入れられるかのみが自尊心と関係するのではないかと推察される。

性同一性障害当事者における“現実展望的性同一性”の低次2因子について

“現実展望的性同一性”の低次因子である“展望的性同一性”は、非当事者よりも当事者のほうが得点が高かった。これはおそらく、身体的性別ではない性別のほうに帰属しているがゆえに、余計に性別を意識せざるを得ない状態にあり、非当事者以上にありたい姿への意識が明確なのではないかと考えられる。

一方、“社会現実的性同一性”については、男性の得点が有意に高かった。これにより、こうありたいという姿が明確でありながら、現実の社会では相対的に男性ほど強くはジェンダー・アイデンティティをもてないのが性同一性障害当事者であり、こうありたいという姿も当事者ほどには明確でなく、しかも現実社会でも男性ほどには強くジェンダー・アイデンティティをもてないのが女性だということが示唆されたと思われる。

結論と今後の課題

以上のように、Erikson のアイデンティティ感覚という概念を取り入れ、性的マイノリティの者でも回答の意義のある尺度が作成された。

また本尺度は、ある性別に対するアイデンティティ感覚について抽象的に質問しているため、文化社会における性役割の具体的な内容が変容したとしても使用可能だと思われる。たとえば、洋服や髪型に気を配るということが女性役割とはみなされなくなった場合、既存の尺度では“女性アイデンティティが弱い”と判断されるが、本尺度の場合はそうした変容があったとしても、変わらず

に女性へのアイデンティティを測定できると考えられる。このように具体的な性役割とジェンダー・アイデンティティとが弁別できるようになったため、ジェンダー・アイデンティティとかわりの深い性役割とあまりかわりのない性役割の検証が可能になり、ジェンダー・アイデンティティに寄与する要因についての研究が進むと思われる。また、ジェンダー・アイデンティティが高ければ高いほど、本当に精神的な健康や幸福感によいのかどうかという側面からも展開は可能である。

ただし信頼性に関しては、時間的な安定性という観点からは得られていないため、今後確認する必要があるだろう。

Money (1965) の定義にもあるように、ジェンダー・アイデンティティとは、“男性あるいは女性、あるいはそのどちらとも規定されないものとしての個性の統一性、一貫性、持続性”であるが、残念ながら今回はこの中の“そのどちらとも規定されないものとしての”データを採用することができなかった。今後はこのような規定されないものとしてのジェンダー・アイデンティティに関しても検討していきたい。

引用文献

- 秋山俊夫・板井修一 (1986). 身体像に関する研究——青年期女性の性同一性を中心にして—— 福岡教育大学紀要, **36**, 151-160.
- Althof, S. E., Lothstein, L. M., Jones, P., & Shen, J. (1983). An MMPI subscale (Gd): To identify males with gender identity conflicts. *Journal of Personality Assessment*, **47**, 42-49.
- 青木紀久代 (1991). 女子中学生における性同一性の形成 心理学研究, **62**, 102-105.
- 東 清和 (2000). 男性性・女性性と社会的自尊感情との関連性 早稲田大学大学院教育学研究科紀要, **10**, 1-11.
- 東 清和 (2002). 性同一性カテゴリーと自尊感情との関連性——伝統一致モデルの検証—— 早稲田大学教育学部学術研究 (教育心理学編), **50**, 1-12.
- 馬場安希 (1997). 女性役割としての美・従順の葛藤構

- 造 性格心理学研究, **6**, 69-70.
- Bailey, M., Dunne, M., & Martin, G. (2000). Genetic and environmental influences on sexual orientation and its correlates in an Australian twin sample. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 524-536.
- Bem, S. L. (1974). The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 155-162.
- Blanchard, R., & Freund, K. (1983). Measuring masculine gender identity in females. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **51**, 205-214.
- Buhrich, N., Bailey, M., & Martin, G. (1991). Sexual orientation, sexual identity, and sex-dimorphic behaviors in male twins. *Behavior Genetics*, **21**, 75-96.
- Burke, P., Stets, J., & Piroggood, M. (1988). Gender identity, self-esteem, and physical and sexual abuse in dating relationships. *Social Psychology Quarterly*, **51**, 272-285.
- Coolidge, F., Thede, L., & Young, S. (2002). The heritability of gender identity disorder in a child and adolescent twin sample. *Behavior Genetics*, **32**, 251-257.
- Coopersmith, S. (1967). *The antecedents of self-esteem*. San Francisco: Freeman.
- Diamond, M. (2002). Sex and gender are different: Sexual identity and gender identity are different. *Clinical Child Psychology and Psychiatry*, **7**, 320-334.
- 土肥伊都子 (1996). ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成 教育心理学研究, **44**, 187-194.
- Drass, K. (1986). The effect of gender identity on conversation. *Social Psychology Quarterly*, **49**, 294-301.
- 遠藤久美・橋本 宰 (1998). 性役割同一性が青年期の自己実現に及ぼす影響について 教育心理学研究, **46**, 86-94.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton & Company.
(エリクソン, E. H. 仁科弥生 (訳) (1977, 1980). 幼児と社会 1・2 みすず書房)
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: W. W. Norton & Company.
(エリクソン, E. H. 小此木啓吾 (訳編) (1973). 自我同一性 誠信書房)
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: W. W. Norton & Company. (エリクソン, E. H. 岩瀬庸理 (訳) (1973). アイデンティティ 金沢文庫)
- Freund, K., Langevin, R., Staterberg, J., & Steiner, B. (1977). Extension of the Gender Identity Scale for males. *Archives of Sexual Behavior*, **6**, 507-519.
- 針間克己 (1999). 性同一性障害の心理療法 馬場禮子・福島 章・水島恵一 (編) 臨床心理学大系第19巻 人格障害の心理学 金子書房 pp. 282-302.
- 針間克己 (2000). セクシュアリティの概念 公衆衛生, **64**, 148-153.
- Heyes, S. C., & Leonald, S. R. (1983). Sex-related motor behavior: Effects on social impressions and social cooperation. *Archives of Sexual Behavior*, **12**, 415-436.
- 東 優子 (2000). ジェンダー指向をめぐる医療と社会 原ひろ子・根村直美 (編) 健康とジェンダー 明石書店, pp. 205-224.
- 東 優子 (2005). 当事者に対する社会的支援 — 誰の, 何を支援していくのか — モダンフィジシャン, **25**, 435-438.
- Hines, M. (2004). *Brain gender*. New York: Oxford University Press.
- 石田英子 (1994). ジェンダ・スキーマの認知相関指標における妥当性の検証 心理学研究, **64**, 417-425.
- 伊藤裕子 (1978). 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, **26**, 1-11.
- 伊藤裕子 (2001). 青年期女子の性同一性の発達 — 自尊感情, 身体満足度との関連から — 教育心理学研究, **49**, 458-468.
- 伊藤裕子・秋津慶子 (1983). 青年期における性役割観および性役割期待の認知 教育心理学研究, **31**, 146-151.
- 狩野 裕 (1998). 不適解の原因と処理: 探索的因子分析 大阪大学人間科学部紀要, **24**, 303-327.
- 柏木恵子 (1972). 青年期における性役割の認知II 教育心理学研究, **20**, 48-58.
- Knafo, A., Lervolino, A., & Plomin, R. (2005) Masculine girls and feminine boys: Genetic and environmental contributions to atypical gender development in early childhood. *Journal of Personality and Social Psychology*, **88**, 400-412.
- 小出 寧 (2000). 性別受容性尺度の作成 実験社会心理学研究, **40**, 129-136.
- Kruijver, F. P., Zhou, J. N., Pool, C. W., Hofman, M. A., Gooren, L. J., & Swaab, D. F. (2000). Male to female transsexuals have female neuron numbers in a limbic nucleus. *The Journal of Clinical Endocrinology & Metabolism*, **85**, 2034-2041.
- Kurian, G., & Kukreja, S. (1995). 16PF correlates of masculine gender identity: A preliminary report. *Psychological Studies*, **40**, 175-178.

- 松本邦裕 (1997). 摂食障害の治療技法——対象関係論からのアプローチ—— 金剛出版
- 松本真理子・村上英治 (1985). 女子青年の性同一性に関する研究——梓づけ面接法による接近の試み—— 心理臨床学研究, **2**, 32-43.
- Money, J. (1965). *Sex research; New developments*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Money, J. (1994). The concept of gender identity disorder in childhood and adolescence after 39 years. *Journal of Sex and Marital Therapy*, **20**, 163-177.
- O'Heron, C., & Orlofsky, J. (1990). Stereotypic and Non-stereotypic sex role trait and behavior orientations, gender identity, and psychological adjustment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 134-143.
- 小此木啓吾・及川 卓 (1981). 性別同一性障害 懸田克躬 (編) 現代精神医学大系第8巻 人格障害・性的異常 中山書店 pp. 233-237.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- 齊藤千鶴 (2004). 摂食障害傾向における個人的・社会文化的影響の検討 パーソナリティ研究, **13**, 79-90.
- 佐々木掌子 (2006). ジェンダー・アイデンティティと教育——性的自己形成における遺伝と環境—— 哲学 (慶應義塾大学三田哲学会刊), 第115集, 305-336.
- 下條英子 (1997). ジェンダー・アイデンティティ——社会心理学的測定とその応用—— 風間書房
- Spence, J. T., Helmreich, R. L., & Stapp, J. (1975). Ratings of self and peers on sex role attitudes and their relation to self-esteem and conceptions of masculinity and femininity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 29-39.
- Stoller, R. J. (1964). A contribution to the study of gender identity. *The International Journal of Psycho-analysis*, **45**, 220-226.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性感覚の構造——多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成—— 教育心理学研究, **49**, 265-273.
- 谷 冬彦 (2004). アイデンティティの定義と病理的なアイデンティティの形成メカニズム 谷 冬彦・宮下一博 (編) さまよえる青少年の心——アイデンティティの病理—— 発達臨床心理学的考察 北大路書房 pp. 2-8.
- 鐘幹八郎 (2002). ライフサイクルにおける男と女 鐘幹八郎著作集I アイデンティティとライフサイクル論 ナカニシヤ出版 pp. 233-254.
- 上野千鶴子 (2002). 差異の政治学 岩波書店
- Wade, J., & Gelso, C. (1998). Reference group identity dependence scale: A measure of male identity. *The Counseling Psychologist*, **26**, 384-412.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造, 教育心理学研究, **30**, 64-68.
- Zhou, J. N., Hofman, M. A., Gooren, L. J., & Swaab, D. F. (1995). A sex difference in the human brain and its relation to transsexuality. *Nature*, **378**, 68-70.
- Zucker, K. J., & Bradley, S. J. (1995). *Gender identity disorder and psychosexual problems in children and adolescents*. New York: Guilford Press.

Development of Gender Identity Scale

Shoko SASAKI¹ and Koken OZAKI²

¹Graduate School of Human Relations, Keio University, Research Fellow of the Japan Society for the Promotion Science

²Japan Science and Technology Agency

THE JAPANESE JOURNAL of PERSONALITY 2007, Vol. 15, No. 3, 251–265

The purpose of this study was to develop Gender Identity Scale (GIS). In previous studies, gender identity was measured as specific gender roles and/or sexual orientation that the person assumed. The new scale, however, was to measure the sense of identity with one's gender, based on the identity theory of Erikson. Participants in the preliminary study were university students, 153 women and 153 men, who completed the new scale. Several models were tested against the data: two factor, four factor, and hierarchical models. The hierarchical model, with two higher-level factors and two lower-level factors each, was the best fit. In order to examine validity of GIS, the new scale, university students, 205 women and 207 men, completed it along with such other scales as gender role, gender acceptance, and self-esteem. In addition, people with gender identity disorder, 120 MTF (male to female) and 155 FTM (female to male), responded to the scale. Results indicated that the scale had adequate validity.

Key words: gender identity, transgender, gender identity disorder, scale